

聖書：ローマ 10：14～21

説教題：一日中、手を差し伸べ

日時：2016年2月21日（朝拝）

ローマ 9～11 章では「イスラエルの問題」が扱われています。問題になっていることは何でしょうか。それは旧約時代からずっと神の民として導かれて来たユダヤ人が、ついに神が遣わしたメシヤ、キリストを信じていないことです。そしてキリスト教会に連なっていない。この現実をどう考えたら良いのかということです。旧約時代の神の様々な約束は無効になったのか。旧約の歴史は全部無駄になったのか。この問題についてパウロは 9 章では「神の選び」という観点から述べました。それに続くこの 10 章では「彼らユダヤ人の責任」という観点から論じています。前回の 1～13 節では、「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる」と述べられました。救いに必要な義は、神が全部キリストにあって備えてくださいました。それはもうあなたの近くにある。あとはそれを心に信じ、口で告白するだけで救われるということでした。

では「主の御名を呼び求める」ためには、どんな条件が必要かが今日の箇所です。まず 14～15 節前半：「しかし、信じたことのない方を、どうして呼び求めることができるでしょう。聞いたことのない方を、どうして信じることができるでしょう。宣べ伝える人がなくて、どうして聞くことができるでしょう。遣わされなくては、どうして宣べ伝えることができるでしょう。」 主の御名を呼ぶためには、まず主を信じる必要があります。信頼していない人によりかかることはできません。信頼があって、より頼むことができます。しかしその信頼のためには相手がどんな人かについて聞かされ、知らされなければなりません。私たちは知らない人を信じることはできません。ですから聞くことが必要です。しかし聞くためには、さらに宣べ伝えてくれる人が存在しなくてはなりません。そういう働きをする人がいて初めて私たちは信頼すべきお方について知ります。そしてさらにもう 1 ステップ、御言葉を伝える人は遣わされなければ存在しません。「遣わされる」という言葉は受け身形ですが、誰が遣わすのでしょうか。それは神でしょう。ここに伝道は神から始まることを私たちは改めて知ります。伝道は単なる人間的な事業ではないのです。神が遣わすことによって伝道者が存在し、みことばを取り次ぐ働きがなされます。その伝道者の存在を通して、私たちは御言葉を聞きます。そしてみことばを聞くことによって、その方を信じ、御名を呼ぶ者となり、救われるのです。ですからこの一連のプロセスの根本に何よりも神の働きを見るべきなのです。伝道

は神から出ている事業なのです。私たちはその神に召されて神の働きにあずかっている者たち、用いていただいている者たちなのです。

15 節後半には、「良いことの知らせを伝える人々の足は、なんとりっぱでしょう。」とあります。パウロはこの御言葉を引用することによって、伝道の第一段階は満たされているということを述べていると思われまます。神は宣教者を遣わしておられます。これはももとはバビロン捕囚からの解放の知らせを伝える人のことを言ったものです。その人の足が立派だとありますが、これは文字通り、その人の足が素敵だという意味ではなく、その知らせの「到着」という意味でしょう。バビロン捕囚からの解放の知らせが到着することは大いなる喜びを持って受け止められ、歓迎されるべきことでしょう。これはやがてのイエス・キリストにおいて差し出される真の福音、解放の福音を指し示すものです。神はそのように素晴らしい福音の使者を遣わしておられます。大事な最初のステップはしっかり踏まれているのです。

しかし！と 16 節は始まります。パウロは神が福音の使者を遣わして下さっていることを思った時、それと対照的な残念な事実思いを向けざるを得ませんでした。それは「すべての人が福音に従ったのではない」ということです。これはすべての人々にも当てはまることですが、ここで特に考えられているのはユダヤ人です。彼らの多くが福音を拒否しています。悲しい事実です。パウロはここでイザヤ書の言葉を引用して、これは旧約時代からすでに預言されていたことだとしていますが、だからと言って彼らがそうして良い言い訳にはなりません。パウロはもう一度話を元に戻して 17 節で「信じるためには聞くことが必要であり、聞くのはキリストについてのことばによる」と述べます。このプロセスを確認した上で、2つのことを問います。

その一つ目は、果たして彼らは聞こえなかったのかということ。彼らが福音に従わなかったのは、彼らに福音が聞こえなかったからなのか。決してそうではない、とパウロは言います。そして詩篇 19 篇の言葉を引用します。「その声は全地に響き渡り、そのことばは地の果てまで届いた。」この詩篇 19 篇はご存知の通り、「天は神の栄光を語り告げ、大空は御手のわざを告げ知らせる」という言葉から始まります。そこでは自然啓示あるいは一般啓示のことが述べられています。造られたこの世界はその作者である神をあかししており、被造物はみな神の栄光を語り伝えていきます。パウロはそのことばを用いて、今やこれは特別啓示であるイエス・キリストの福音についても当てはまると言っています。福音は今や全世界に宣べ伝え

られています。もちろんここでの「全地」という言葉は、当時の地中海世界という世界観の中で考えられるべきでしょう。ユダヤ人は世界各地に散って住んでいましたが、その人々のところにもきちんと福音は伝えられたのです。彼らは確かにそれを聞いたのです。

そこでパウロは19節で2つ目の問いを發します。「果たしてイスラエルは知らなかったのでしょうか」と。耳には届いても、その意味が分からなかったのでしょうか。理解できなかったのでしょうかということ。パウロはこれに対しても、そうでない！と言います。そして彼は旧約聖書の2つの御言葉を引用します。一つは19節にある通り、モーセの言葉です。すなわち「律法の書」からです。もう一つは20～21節で引用されるイザヤ書の言葉です。すなわち「預言者の書」からです。こうして「律法の書」と「預言者の書」から引用することによって、これは旧約聖書全体にしっかり言われていたことであって、彼らが知らなかったと弁解できることではないということを示そうとしています。では彼らが分かっていたこととは何でしょうか。それは19節にある通り、やがて異邦人が神の民として召されて、その異邦人に神の祝福が圧倒的に注がれる時が来ること、そしてそれを見てユダヤ人はねたみ、怒るということです。

これは一体どういうことかと思われるかもしれませんが。引用元の申命記32章を見て分かることは、これはイスラエルの悪に対する神の一つのさばきだったということです。そのもともとの御言葉から分かることは、まずイスラエルが神から顔をそむけて、神でないものを拝み、神のねたみを引き起こしたということ。そこで神もイスラエルに対してそうすると言われたのです。すなわち異邦人に多くの祝福を注いで、イスラエルにねたみを引き起させると。そのことがまさにパウロがこの手紙を書いた時代に現実に起こっていました。異邦人がどんどん救われ、キリスト教会の多数を占めるようになっていました。この現実を目の前にして、ユダヤ人は何を思うべきだったでしょうか。それは神が以前言われていた通りのことが起こっているということでしょう。彼らはこれを見て知らないとは言えない。予告されていた通りのことが起こっていたのです。

しかしユダヤ人はこれを認めたくありませんでした。彼らにとってこれは我慢ならないことでした。ユダヤ人は異邦人を犬と呼んで見下げていました。その彼らと自分たちが同列に置かれるのはとても嫌なことです。彼らが神の恵みを受けて、イエス・キリストを信じるだけで救われるとされるのがたまたまなく不愉快。そこで

彼らは神の福音に従わなかった。そして神が差し出している「信仰による義」を捨てて、自分の行ないに基づく自分自身の義を立てようとしたのです。しかしそんな義は神の前には通用しません。人間の目で比較すれば、それぞれの行ないには優劣があるように思えるかもしれませんが、神の前ではほとんど考慮するに値しない差でしかないのです。先週、コップに入った水の話をしました。どんなにきれいな水を持って来ても、そこにどぶから汲んで来た液体をスポイトで一滴でも垂らしたら、もう私たちはそれを飲もうとしません。どぶの汚い成分はコップの中のあらゆる部分に浸透・拡散しています。そのように私たちの罪は私たちのあらゆる考えや言葉、振る舞いに染み渡っています。私たちはどぶの液体が一滴でも入った水を「どうぞ！」と差し出されたら怒ります。こんなものを飲めるか！と激怒します。神も同じです。私たちがその水を激しい嫌悪感をもって退けるように、神も罪の染みだらけの私たちの義を激しい嫌悪感を持って退けられるのです。ですから自分自身の義を立てる道に救いはあり得ないのです。ところがユダヤ人は神が用意くださった完全な義のプレゼントを受け入れなかった。分からなくてそうしたのではなく、分かった上で別の道を行こうとしたのです。

もう一か所、イザヤ書からパウロは20～21節で引用しています。まず20節：「またイザヤは大胆にこう言っています。『わたしは、わたしを求めない者に見いだされ、わたしをたずねない者に自分を現わした。』」これは異邦人の救いをあらかじめ述べたものとしてパウロは引用しています。「求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。」という言葉が山上の説教の中にあります。ところがここでは彼らが求めているのに、神はご自分が見出されるようにされた。ご自身を尋ねない彼らに、ご自分からご自分を現わされた。すなわちこれはただ神の恵みによるということです。この恵みによって、異邦人たちは神の福音を受け入れ、救われました。

ではイスラエルについて神はどのように言っておられたのでしょうか。21節：「またイスラエルについては、こう言っています。『不従順で反抗する民に対して、わたしは一日中、手を差し伸べた。』」ここに神はイスラエルになおも救いの手を差し伸べ続けたと言われています。すでに見ましたように、イスラエルは神に対して不従順でした。神はこんな民などわたしはもう捨てたと言われてもおかしくありませんでした。ところがそんな不従順で反抗する民に、神は一日中、手を差し伸べたと言っておられます。ここに示されているのは神の驚くべき忍耐と寛容でしょう。神は彼らになおも、ご自身のもとに帰って来るように、そして救いにあずかるよう

にと働き続けておられる。しかも一日中とされています。彼らの反抗にもかかわらず、その手を休めることなく、ずっと、です。私たちが見つめるべきはこのような神のお姿です。それゆえにこの神を退けたら、もう救いはないというのは明らかなことです。一体何が悪いのかと言ったら、答えはイスラエルが悪いからしかありません。条件はみな満たされています。神はなお求めてくださっています。それなのにこの招きを退けたら、責任はユダヤ人にあるとしか言えなくなる。これでイスラエルは終わりなのでしょうか。滅びしかないのでしょうか。それが次の11章でさらに語られて行きます。しかしここに「問題はどこにあるのか」「責められるべきは誰なのか」がはっきり語られているのです。

以上の箇所から最後に2つのことを改めて心に留めたいと思います。その一つは福音のメッセージは神から出ており、神が私たちに語りかけてくださっているということです。今や時満ちて、福音は全世界に伝えられています。異邦人にも差し出されています。私たちの前にも差し出されています。私が信仰告白するための条件はみな満たされています。神が遣わすことによって、宣べ伝える人が存在し、福音が届けられ、それを私たちが聞いています。あとはもう私たちの責任なのです。ここで私たちがミスしてしまうことがありませんように！ここまで来ているのに、せっかく備えられたものを台無しにすることがありませんように！そのことによって自分の救いを自ら失わせる者となりませんように！Ⅱコリント6章1～2節：「私たちは神とともに働く者として、あなたがたに懇願します。神の恵みをむだに受けたくないようにしてください。神は言われます。『わたしは、恵みの時にあなたに答え、救いの日にあなたを助けた。』確かに、今は恵みの時、今は救いの日です。」

もう一つ心に刻みたいのは、この福音はただ機械的にここにあるのではないということです。この背後にある神の深い思いについて私たちは今日の御言葉を通して十分に思い巡らしたい。20節に神はご自身を尋ねない者に現わしたとありました。確かに私から積極的に正しい神を求めたのではなかったのに、神の方で一生懸命に働きかけてくださり、まことの神を見いだすように導いてくださった。私が今かくあるは、ただこの神の恵みによるということです。そしてイスラエルに対して「一日中、手を差し伸べ」とありました。神はこのような神です。神は同じように御前で扱いにくく、反抗的で不従順な私たちを見て耐え忍んでくださっているのではないのでしょうか。そして一日中、手を差し伸べてくださっているのではないのでしょうか。私たちはこの神の慈愛と忍耐と寛容を軽んじないようにしたいと思います。これを軽んじて、自らの上に重いさばきを積み上げることがないように。むしろこの

神を感謝して見上げて、神の招きに応答したい。この方がキリストにおいて差し出してくださっている無償の「神の義」を受け取り、キリストにある全き救いに生かされる者へ導かれたいと思います。